



JIC インフォメーション

第 239 号 2026 年7月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

<https://www.jic-web.co.jp>

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

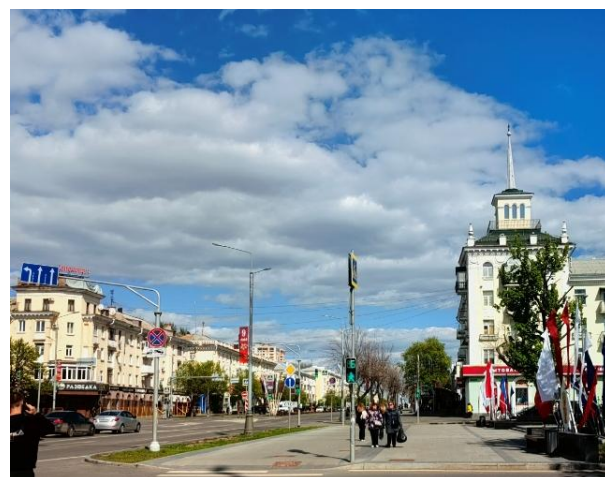
はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋



京都外国語大学 第 3 回全国ロシア語圏プレゼン大会

.....小西 章子.....2P

《日ロ交流情報》

ロシア文化フェスティバル 2026 オープニングほか.....3 P

《投稿》旅行記〜ドンバスの今を見る

ルガンスク、ドネツクを訪問.....田村 虎之亮.....5P

《連載》「徳山あすかのロシア生活」

モスクワ国際バレエコンクール、日本勢が大活躍.....7P

《連載》こんな時代にロシア語のすすめ

「汚れた紙幣はさっさと使う」.....黒田 龍之助.....10P

《本の紹介》「海峡の向こうの隣人たち」ほか.....11P

《講演録》「プーチンの歴史認識とウクライナ戦争」

.....上月 豊久.....13P

Jクラブ(JIC 友の会) 会員募集中。年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

京都外国語大学 第3回全国ロシア語圏プレゼンテーション大会

全国から高校生・大学生が集結

小西 章子 (JIC 大阪)

2026 年 6 月 13 日(土)、京都外国語大学で、全国ロシア語圏プレゼンテーション大会が開催されました。第 3 回を迎えたこの大会は、「私が推したいロシア語圏」がテーマです。ロシア語圏の国々・地域に関心を持っている高校生・大学生のみなさんが、各々興味のある点を探求し、その成果を発表しました。

参加者は関西圏にとどまらず、東は秋田県から、西は島根県や香川県まで、大会名の通り、全国から広く集まっていました。

高校生の部は 6 組 9 名、一般の部は 9 名（うち 1 名辞退）のエントリーがあり、各部門 3 位までの入賞者には副賞が贈呈されました。ジェーアイシー旅行センター（株）も協賛企業として、第 1 位入賞者にオンラインロシア語研修（サンクトペテルブルグの語学学校「デルジャーヴィン・インスティトゥート」提供レッスン）を贈呈しました。

また、この度は私・小西も、京都外国語大学の五十嵐徳子先生、ISI ランゲージスクールの宮久保祐子先生とともに審査員を務めるという大役をいただきました。参加者のみなさんそれぞれの「推し」への熱量を間近で感じることができましたし、みなさんがロシア語圏の社会や文化について、学問を超えた興味を持っていることに感銘を受けました。

プレゼンテーション大会の結果と発表テーマは、京都外国語大学ロシア語学科のホームページに詳しく掲載されています。

本報告では、審査員の一人として参加した感想を、みなさんと共有したいと思います。

【高校生の部】

この大会の一つの特徴として、日本語でプレゼンテーションができるという点があります。ロシア語力は全く必要ありません。高校生の時点でロシアや旧ソ連圏に興味を持っていても、ロシア語を学ぶことは簡単なことではありません。身近にロシア語を学べる環境があることは非常に稀です。言語的な間違いに気を遣うことなく、自分の言葉で、内容に注力して説明することができます。言語力とは別のベクトルで設けられたこの大会は、ロシア語の習得に及ばない段階であっても、ロシア語圏の何かしらに興味を持つ学生にアプローチする有意義な大会だと思います。

参加者が選んだテーマはどれも分かりやすく、スライド



はシンプルながら平易な言葉で要点が見やすくまとめられていました。高校生でもここまで用意ができるものなのかと驚きました。発表も決してスライドを読み上げるのではなく、自分の言葉で説明が加えられ、また SNS を使用してアンケートを実施・考察するなど、それぞれの工夫がありました。

今回は 2 名で参加した各組が上位入賞しました。プレゼンテーションからは、準備段階でのお互いの協力が感じられ、発表内でも体を使った実演をするなどの工夫が見られました。しかし、高校生にもかかわらず 1 人で果敢にエントリーし、プレゼンテーションに挑んだ人たちの挑戦にも拍手を送りたいと思います。壇上から緊張感が伝わってきましたが、興味を持ったポイントが、ダイレクトに伝わる素晴らしいプレゼンテーションでした。

【一般の部】

大学生の参加者も、決してロシア語を専攻している学生ばかりではありませんでした。理学部、商学部の学生さんもいて、かなりマニアックなもの、本格的な研究に近いもの、「初耳ですが??」といった人物を深掘りしたものなど、さすが大学生と唸るような多種多様な内容が揃いました。用意されたスライドは、ビジュアル的に工夫が凝らされていたものが多く、「推し」の魅力がありすぎて情報がギュウギュウに詰め込まれたものもありました。

大学生のみなさんのプレゼンテーションから感じたのは、自分で体験したことや自分の目で見えてきたことに関する話には説得力が宿るということです。実際に体験するというのはなかなか簡単ではありませんが、これから将来、興味を持ったことに対しての探求の一環として、本を読む

だり、インターネットで調べたりするのをきっかけに、実際に見たり体験したりすることにつながっていくといいな、と思いました。



(上)高校生の部(下)一般の部 の参加者たち



【さいごに】

今回このプレゼンテーション大会に参加させていただき、ロシア語力は関係なく、ロシア語圏の「推し」についてプレゼンテーションをする機会があるということが、素晴らしいと思いました。高校生のみなさんにとっては、ロシア語を将来学びたい、大学に入ったらロシア語圏について研究をしたい、と思うきっかけになったかもしれません。ほかの参加者のプレゼンテーションのテーマが気になったという方もいると思います。大学生のみなさんは、自分の興味の対象について自分の目で実際に見てみたい、現地に行ってその面影を感じたい、などと思った方もいると思います。ぜひ、行ってみてください！

よろしければ、その節は JIC にご相談いただければ幸いです。

また、休憩時間中や大会後の懇親会では、参加者のみなさんは学校や年齢に関係なく交流を楽しみ、大学の先生方や審査員の方とも話しをしていました。ロシアやロシア語圏に興味のある人が身近にいないという参加者も多く、お互いに刺激を与え合う貴重な機会になったと思います。来年度以降も引き続き、同様のプレゼンテーション大会が開催されることを願っています。ジェーアイシー旅行センターもこのプレゼン大会をさらに応援したいと思います。

<日ロ交流情報>



日ロ協会がセミナー開催（6月4日） 上月豊久・前駐ロシア大使が講演

6月4日、日ロ協会の「第1回ロシアを知るセミナー2026」（通算 55 回）が東京の衆議院第二議員会館で開催されました。「プーチンの歴史認識とウクライナ戦争の行方」と題して、前駐ロシア日本大使の上月豊久氏（東海大学平和戦略国際研究所所長）が講演。プーチン大統領が歴史解釈を自らの政策にいかにも利用しているか、ウクライナ戦争の停戦交渉をめぐるプーチン流交渉スタイルや今後の交渉の焦点などが分かりやすく話されました。（13 頁に講演録を掲載）

講演に先立って、西村康稔会長（衆議院議員）が「日ロ関係をめぐる状況は決して芳しくないが、しかるべき時に備えて、交流をしっかりと続けていきたい」と挨拶したのが印象的でした。



ロシア文化フェスティバル IN JAPAN オープニング・コンサート(5月11日)

5月11日、ロシア文化フェスティバル IN JAPAN 2026 のオープニング・コンサートが、東京・銀座ブロッサム中央会館にて盛大に開催されました。コンサートに先立って、文化フェスティバル・ロシア組織委員会のシュビトコイ委員長、

日本組織委員会の栗原小巻委員長があいさつ。今年は日ロ国交回復 70 周年、文化フェスティバル 20 周年にあたり、さまざまな困難はあっても文化交流を維持・拡大していこうと力強く述べられました。

コンサートでは、ロシアから来日した 3 人の演奏家＝アレクサンドル・ラム（チェロ）、ニキータ・リュチコフ（クラリネット）、チモフェイ・ウラジーミロフ（ピアノ）を交え、日ロの若手アーティストたちが、素晴らしい演奏で観客を魅了しました。



ロシア文化フェスティバル 20 周年 記念レセプション(5 月 12 日)

オープニング・コンサートの翌 5 月 12 日、ロシア文化フェスティバル 20 周年を記念するレセプションが東京・帝国ホテルで開かれました。記念レセプションには、鈴木宗男参議院議員、鳩山由紀夫元首相、上月豊久前駐ロシア日本大使ら多くの来賓が参集し、シュビトコイ・ロシア大統領文化協力特別代表、ノズドレフ駐日ロシア大使らと歓談しました。

ロシア文化フェスティバルは日ロ国交回復 50 周年を記念して 2006 年から始まり、音楽やバレエ、美術、映画、演劇などロシア文化を紹介する多彩な催しが日本各地で行われてきました。ウクライナ戦争で日ロの政治対話と経済交流が中断する状況下で、同フェスティバルは両国を繋ぐ貴重な架け橋となっています。日本外務省が海外安全情報でロシアをレベル 3（渡航中止勧告）に指定している中でも、バレエ留学やロシア語留学など、日ロの人的交流は完全には途絶えていません。何よりもロシアからの訪日観光客はコロナ前（年間 10 万人）を大幅に上回る水準に激増しており（25 年の訪日ロシア人客は 19 万人！）、日本とロシアが互いに引越できない隣人として交流を続ける基盤は損なわれていません。この 5 月末には、日本の経済代表団がロシアを訪問し、ウクライナ戦争の終結後を見据えた経済課題を協議するなど、対話復活の機運も進み始めています。今後も、ロシア文化フェスティバルは文化交流を通じて日ロ両国民の心と心をつなぎ、

相互理解の増進に重要な役割を果たし続けることが期待されます。



在大阪ロシア総領事館で アコーディオン・コンサート

ゴールデンウィーク中の 5 月 5 日、在大阪ロシア総領事館にて、「情熱と哀愁のロシア音楽」と題して、アコーディオン・コンサートがありました（主催：関西日ロ文化サロン／協賛：大阪日ロ協会）。演奏者は、ロシア民族楽器バイヤン（ボタン式アコーディオン）の名手スタス・ヴェングレフスキーさん（モルドヴァ出身で現在アメリカ在住）と、大阪出身のアコーディオニスト後藤ミホコさん。スタスさんがリードし、ミホコさんが追いかける二人即興の競演は圧巻で、アコーディオンの魅力とロシア音楽のメロディを観客は存分に楽しみました。



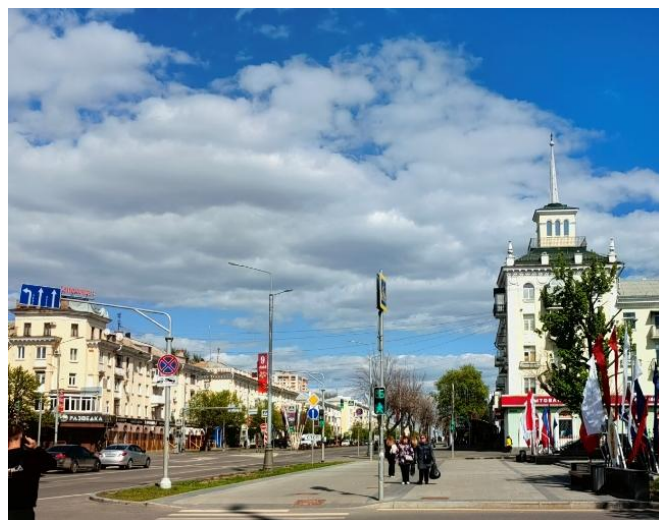
「ロシアの日」（6 月 12 日）を前に 大使館、領事館でレセプション

6 月 12 日の「ロシアの日」を前に、東京のロシア大使館、大阪の総領事館で、6 月 11 日にレセプションが開かれました。5 年目に入ったウクライナ戦争の下で、今一つ盛り上がりがない集まりではありましたが、ノズドレフ大使と直接言葉を交わせる機会とあって、政財界から多くの参加者が大使館に参集しました。

また、大阪のテルスキフ総領事は 5 年の任期を終えて 7 月初旬に帰任するとあって、このレセプションが事実上のお別れ会となりました。

広島県の田村虎之亮さんから興味深い投稿をいただきました。田村さんは、今年 4 月 30 日～5 月 6 日、友人を訪ねてロシア南部のノヴォロシースクとドンバス（ルガンスク、ドネツク）を訪問。以下は、その簡単な旅行記です。それにしても、現地に心強い友人がたくさんいるとはいえ、行こうと思えば行けるんですね。田村さんの勇気に敬服するしかありません。

なお、田村虎之亮さんは、東京総合写真専門学校を卒業後、ベラルーシのミンスク国立言語大学に留学されました。最近、写真展「EAST #3.5 俺が見たロシア」を開催するなど、広島・大阪・東京を中心にカメラマンとして活躍されています。（編集部）



ルガンスク市内の街並み

投稿《旅行記》

ドンバスの今を見る～ルガンスク、ドネツクを訪問

田村 虎之亮（広島県在住、カメラマン）

どういう縁なのかは分からないがロシアの南部とドンバス地方に友人が点在している。ロシア国内の友人は何人かいるがその殆どはここに集中している。5 月の連休に行く旨を、前々から話していた。ノヴォロシースクに住む友人の R はとにかく私の世話をしたがるのだが、ついにはノヴォロシースクで私が滞在するアパートを提供してくれた。ドンバス地方、ルガンスクの友人は私と行動を共にしてくれるそうだ。

モスクワからバスでルガンスクへ

4 月の終わりにソウルからドーハを経由してモスクワに向かい、翌日の 15 時にはモスクワのシェレメチエヴォ空港に到着した。入国審査で酷い目に遭わされると思っていたのだが、ほぼ素通りで指紋の登録だけで終わった。

空港からバスと地下鉄を乗り継いで中央バスセンターに到着する。ルガンスク行きのバスはここから出発している。隣がショッピングモールなので中を散策すると携帯ショップが見えた。携帯電話の SIM カードを買おうとするが銀行で手続きをしないといけないらしい。時間がないので諦めた。ローミングは楽天モバイルだが直ぐに繋がっていたので問題はなかった。

19:30 にルガンスク行きのバスは出発した。何のことはないただの高速バスだった。ただ、モスクワを離れると携帯の電波は繋がらなくなった。

ロストフ州の検問所を通過

翌日の 8 時前、ロストフ州の小さなバスセンターで小休憩が取られた。電波は回復していたので友人たちに連絡を入れた。それから 30 分ほど走ると高速道路の料金所のような所に停車する。運転手はパスポートを持って降りるように言い、私たちは外に出て中の建物に入ってしまった。パスポートコントロールらしい。要するに、ここはかつてのロシアとウクライナの国境検問所であり、新たに併合した地域に入る場合は全員がパスポートコントロールを受けなければならないということだ。検問所の名前はドネツク検問所、ウクライナ側にはイズヴァリノ検問所と書かれている。

3 列に並び一人一人がパスポートを係の者に見せる。私も同じように立ち回る。訪問目的と訪れるのが 2 回目だと言うと係の女性は内線電話を取り、別の部屋へ行くように言った。別の係の誘導で離れの詰め所に行き、部屋に案内されると迷彩服の男が座っていた。名前と住所、私と両親の職業を聞き、パソコンに打ち込んでいる。友人の話や今の戦争についてどう思うかなどの質問もあったが 20 分程で解放され、バスに戻った。

ルガンスクは変わり映えのしない旧ソ連の街並

それから一時間走ってルガンスクのバスセンターに到着

した。S という友人が手を振って待っていてくれた。私たちは予約したアパートに荷物を置き、街を散策した。特に変わり映えしない旧ソ連の街並みだった。軍用車がひっきりなしに往来している所はよそとは違うかもしれないが。

14 時にドネツクへ行くバスを予約していたので一旦 S と別れ、翌朝また会う約束をする。

ルガンスクから日帰りでドネツクへ

バスはマイクロバスでドネツクまでは3時間半だった。帰りのバスは19時なので、ドネツクのバスセンター周辺を散策するに留めた。それでもルガンスクより栄えているように見える。



ドネツク市内のバスセンター

帰りのバスに乗っていると突然バスが停止し、男は全員降りるように言われる。降りると軍人がパスポートを一人一人チェックしていた。相手が警察ではないからか男達はいくわえタバコをしながらパスポートを見せたり、茂みで用を足そうとしたりとやりたい放題だった。私の番になったが特に咎められることなくバスに戻った。

ルガンスクに戻ったのは23時を回っていた。タクシーも見つからず、アパートまでの道も分からないのでどうしたものかと思案したが、たまたまベンチでタバコを吸っている青年を見つけ、事情を説明してタクシーを呼んでもらった。アパートに向かう途中、大きな交差点で今度は交通警察の検問に引っかかった。運転手と私のパスポートを見せ、どこに行くのかを聞いただけで降ろされることはなく、無事にアパートに帰還した。

ルガンスクの歴史博物館

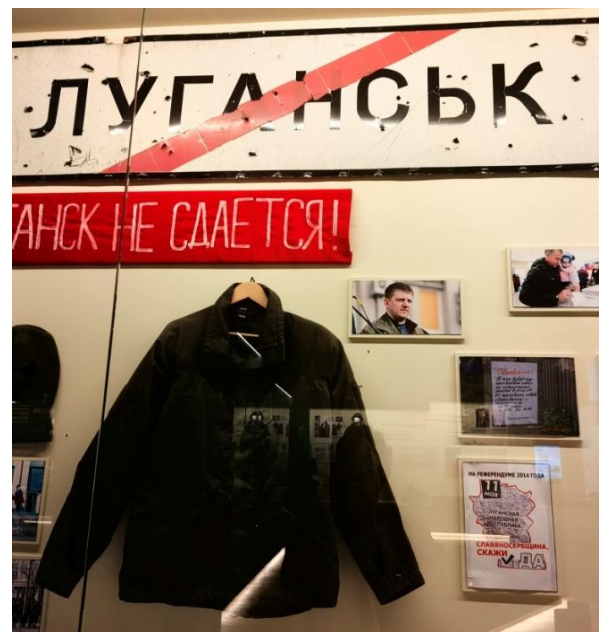
翌朝は友人Aの町へ行った。Aはルガンスク市内からバスで30分離れたЮбилейныйという町に住んでいる(本人は村と言っていたが)。そこへはSと一緒に向かい、バス停でAと待ち合わせた。小さな町で、一時間で1周した。Aは手土産に私にジャムを作ってくれた。

市内に戻り、昼食を食べたあとは歴史博物館に行った。ここにはマイダン革命からドンバス戦争までの資料が常設展

示されているので、それを見たかったのだ。

博物館を見たあとはバスセンターに戻り、18時のバスでノヴォロシースクへ向かった。(了)

(写真)以下は、ルガンスク市内の郷土資料館の展示資料





モスクワのボリショイ劇場



コンクール期間中だけ飾られているバレリーナのオブジェ

第4回 「徳山あすかのロシア生活」

モスクワ国際バレエコンクール、日本勢が大活躍

6月25日からスタートしていた第15回モスクワ国際バレエコンクールが、7月5日に閉幕しました。

1969年に創設されたこのコンクールは、世界三大バレエコンクールのひとつ。今年は35カ国から362件の応募が寄せられ、動画審査を経て30カ国の158名が参加資格を得ました。このコンクールが行われるのは4年に1回。前回、2022年6月に行われた第14回コンクールでは、政治情勢のため参加を見送った人も多く、21カ国から112名のみのエントリーでしたから、今回はだいぶ増えたことになります。

モスクワ国際コンクールに参加するとボリショイ劇場の舞台上で踊ることができるので、それだけでも若いダンサーにとっては特別な体験です。入賞しなくても、自分をアピールできれば、ロシアのバレエ団における採用のチャンスも広がります。また、すでにバレエ団に所属している若手ダンサーにとっては、あらためて実力をアピールし、昇格や新しい役へのチャンスを掴む機会となります。

審査はジュニア部門（19歳以下）とシニア部門（27歳以下）の2つのカテゴリーで行われ、さらに1人で踊るソロと、男女ペアで踊るデュエットに分かれています。日本からは10人が参加し、素晴らしい成績を残しました。

男性ソロ部門でゴールドメダル

コンクールが始まる前から、きっと一位を取るだろうと予想していたダンサーが、やはり取ってくれました。20歳のグジェレフ瞭舞（りょうま）さんが、シニアの男性ソロ部門で

一位となり、金賞を獲得したのです。東京都三鷹市出身で、ベラルーシ人の父と日本人の母の間に生まれたグジェレフさんは、日本国籍を選び日本代表としてコンクールに出場しました。

グジェレフさんは、昨年ロシアの名門マリインスキー・バレエに入団し、



異例の速さで様々な大役に抜擢されています。現在の階級はセカンド・ソリストですが、プリマ・バレリーナを相手に主役も務めており、バレエ団からもかなり期待されていることがよくわかります。

グジェレフ瞭舞さん コンクールのガラコンサートより

私がグジェレフさんの踊りを初めて生で観たのは、昨年12月のマリインスキー・バレエの公演「くるみ割り人形」でした。今年1月に発行されたJICインフォメーション237号のコラムで、サンクトペテルブルクに弾丸旅行し、ファースト・

ソリストである永久メイさんの舞台を見に行った話を書かせてもらいましたが、その時の永久さんの相手役で、王子を踊ったのがグジェレフさんだったのです。ロシアの歴史ある名門マリインスキーの舞台で、日本人2人が主役を務めたということは、私にとって胸の熱くなる出来事でした。

表彰式でグジェレフさんに賞状とメダルを渡したプレゼンターは、コンクールの審査委員長であるスヴェトラナ・ザハロワでした。ザハロワといえばロシアの人民功労芸術家で、ボリショイ・バレエのプリマバレリーナ。ロシアバレエ界を代表する存在です。この2人のツーショットも、バレエファンにとっては感動の瞬間でした。



グジェレフ瞭舞さんとザハロワ審査委員長

そしてグジェレフさんの幼なじみで、2歳年下の渡部出日寿（デニス）さんは、ジュニア部門ソロの男性二位となり、銀賞獲得という快挙でした。渡部さんの両親もベラルーシ人男性と日本人女性で、三鷹市出身です。仲良しで共通点も多い2人が、揃って入賞したのです。渡部さんが踊った「くるみ割り人形」の踊りを見て、普通ならば表情が硬くなってしまうような回転前の一瞬に笑顔を見せるなど、ずいぶん舞台度胸がある人だと思いました。そして回転そのものも、綺麗に決めていました。

さらには、ジュニア部門ソロの女性三位に、名古屋出身の永井咲良さんが選ばれました。永井さんは回転が得意なタイプのダンサーで、「騎兵隊の休日」バリエーションでは可憐な演技を披露しました。



表彰式の渡部出日寿さん



永井咲良さん「騎兵隊の休日」より

指導者の勝利？

今回、影の優勝者とも言えるのは、レオニード・サラファールノフでしょう。ウクライナ出身のサラファールノフは、マリインスキー・バレエのプリンシパルを長く務め、現在ではヤコブソン・バレエやマリインスキー・バレエで若手の指導にあたっています。今回、サラファールノフが各劇場で指導したメンバーが軒並み入賞しており、グジェレフさんもそのひとりです。サラファールノフといえば超絶テクニックの持ち主で、日本にファンも多く、自身もモスクワ国際バレエコンクールで金賞を取っています。指導者としてのサラファールノフは、ダンサーの音楽性や芸術性を伸ばすことに定評があります。コンクールでの教え子の勝因は、彼の目指したテクニックと芸術性の融合にあると思います。技術だけ高くてもロシアでは賞につながらないということを、誰よりもよく知っているのでしょう。

中国系アメリカ人に大注目

ジュニア部門ソロの女性で金賞を獲得したのは、中国系アメリカ人のクリスタル・ファン。彼女も、コンクールが始まる前から非常に注目されていたダンサーでした。というのはこれまでにローザンヌやユースアメリカグランプリといった、世界レベルのコンクールで入賞しており、非常に優れたテクニックの持ち主だからです。特にコンテンポラリーには定評があります。その彼女が、保守的・古典的なロシアバレエ界でどのように受け止められるのかというのが注目ポイントでした。結果は堂々の一位。技術だけでなく表現力、舞台での

存在感は他の参加者とは一線を画しており、バレエスタイルの違いを超えて高く評価されました。演技とバレエの技術を結びつけるのは本当に難しいことなのですが、クリスタル・ファンはそれを自然な形でやってみせました。まだ、サンフランシスコバレエスクールの生徒である彼女、卒業時には世界のバレエ団が獲得に動き出すでしょう。

個人的に驚いたのは表彰式でした。他のジュニアのダンサーは、舞台上では堂々としていても、表彰式では「素の自分」となり、緊張したりオドオドするのが普通です。しかしクリスタル・ファンは、まるで大女優のように自信を持って振る舞い、17 歳とは思えない貫禄でした。一瞬の弱さも見せない彼女、メンタルの強さの違いを見せつけました。



クリスタル・ファン

ロシア勢、まさかの金賞なし

ここまで読んでくれた方は、ロシアのコンクールなのに全然ロシア人の名前が出てこないじゃないかと気づいているかもしれません。そう、今年は、ロシア人が金賞を取った部門がひとつも無かったという、実に異例の年となりました。しかもロシアだけでなく、旧ソ連諸国まで含めても、誰も一位を取れなかったのです。これはモスクワ国際バレエコンクール始まって以来の出来事です。

ロシア紙「コメルサント」は、モスクワ国際コンクールは長年、「自国びいき」の大会という評判を背負ってきたと指摘しています。というのは第1回大会で、当時高く評価されていたアメリカのダンサー、エヴァ・エヴドキモワが第3次審査に進めなかった、ということがありました。当時の審査委員長ガリーナ・ウラノワは、上層部から押し付けられたこの決定に抗議し、それ以降、二度と審査員を務めることはなかったのです。とすると、今回のザハロワをはじめとした審査団は、アメリカ人だろうとロシア人だろうと、自分たちの基準に沿って厳格に審査した、と言えるかもしれません。

また、コメルサントは、「ロシアの劇場はもはや、看板ダンサーを舞台から外してまで大会へ送り出す必要はない」とも指摘しています。確かに、モスクワやサンクトペテルブルクの劇場でバリバリ踊っているベテランのシニアの参加はほ

ぼなく、むしろジュニア部門で、学生や入団1年目の若手たちが、将来への足掛かりとして積極的に参加していました。



今回のコンクールは、世界のバレエ界の新しい潮流が示されていたように思います。超絶技巧よりも、美しさや軽やかさ、エレガンスさ、バレエを構成するそれぞれの要素をいかに丁寧にこなすかということに、重きがおかれていました。それでこそ、このコンクールをロシアでやる意味があったと思います。

夏の間、しばらく劇場はお休みになり、ダンサーは帰省や休暇で散り散りになります。ほかの国の舞台にゲスト出演する人も多くいます。今夏はロシアバレエのスターの来日が目白押しですから、かなり公演の当たり年と言えるでしょう。また、9月からの新シーズン、ロシアを訪れる方はぜひ、各地のオペラバレエ劇場で、本場のバレエを楽しんでもらいたいと思います。



徳山あすか／モスクワ在住ジャーナリスト

略歴；早稲田大学第一文学部卒業。時事通信社に入社。2013年同社を退社しロシアへ。サンクトペテルブルグ工科大学、モスクワ教育大学修士課程を経て、2015年ロシア国営通信社「Rossiya Segodnya」に入社し同社の外国読者向けメディア「Sputnik」日本語版の記者として活躍。2026年同社を退社。現在フリー・ジャーナリスト。

第 16 回

こんな時代にロシア語のすすめ

「汚れた紙幣はさっさと使う!」

旧ソ連時代の3ルーブル札
は各共和国の言語でも表記
されていた ↓↓

黒田 龍之助

2026 年現在、日本の紙幣は新札と旧札が併用されています。買い物をしてお釣りを貰うときも、ATM から引き出すときも、いろいろ混ざっているの、財布の中は賑やかです。最近になって新札が増えてきたかなという気もするのですが、旧札もまだまだ流通しています。もちろんどちらも同じ価値であり、そこに差はありません。

ところがわたしは旧札を見ると、さっさと使ってしまいたくなるのです。これには理由があります。

はじめてソビエト連邦を訪れた 1985 年に流通していたルーブル紙幣は、日本円などに比べてずいぶん小さいものでした。1、3、5、10、25 ルーブル札などがありましたが、当時は確か 1 ルーブルが 150 円くらいでしたので、それ以上の高額紙幣は使った覚えがありません。

それにしても 3 ルーブル紙幣って面白いですよ。いまでも記念にとってあります。もっとも当時はルーブルの海外持ち出しが禁止されていたから、後に手に入れたものです。

その紙幣には真ん中に大きくロシア語で「3 ルーブル」と表記されているのですが、その右下の枠内に小さな字がたくさん印刷されています。当時の連邦構成共和国の各言語で「3 ルーブル」と表記されているのです。最初の ТРИ КАРБОВАНЦІ はウクライナ語。ルーブルのことをカルボヴァネツ карбованець というらしいことは、ウクライナで発行された書籍の値段表記が крб なので想像がつかしました。ТРЫ РУБЛІ はおそらくベラルーシ語なのでしょう。3 が тры になって不思議な気分。ほかにもキリル文字の表記がいろいろあるけれど、さっぱり分からない。ラテン文字が三種類あるからバルト三国なんだろうけど、はて、どれがどの言語なのか。そもそもまったく知らない二種類の文字は、どっちがグルジア語でどっちがアルメニア語なのか.....。当時のわたしはホテルの部屋で紙幣をしばしばと眺めながら、ソ連の多様性を実感していました。

ただしこのような多言語表記は 1990 年代に入ると消えてしまいます。さらに経済が混乱して高額紙幣が次々と現れ、ソ連からロシアになって新たな紙幣が発行され、そこにまたインフレでゼロがたくさん並ぶようになり、本当に目まぐるしく変わっていきました。かつてのようなワクワクはもうあ



りません。

新しい紙幣が発行されると、古い紙幣はどうなってしまうのでしょうか。日本でしたらしばらくは併用できますし、かなり時間が経過しても銀行へ行けば交換してくれます。外国もそうだと信じたいのですが、経済が混乱していたり、政治体制が変換されたりする国では、以前のお金が急に使えなくなることもあります。

ドイツ映画『グッバイ、レーニン』は、東西ドイツ統合直前のベルリンから物語が始まります。精神的に強いショックを受けて 8 か月間昏睡状態にあった母親が、目を覚ましときはベルリンの壁が崩壊して、世の中がすっかり変わっていました。もう一度大きなショックを与えると命の危険があると医者からいわれた息子は、なんとか取り繕うために涙ぐましい努力をします。中でもお母さんが預金のありかをなかなか思い出せず、ようやく見つけたときには交換の期限が過ぎ、紙幣は紙屑になってしまったというエピソードは、見ていて怖くなりました。旧ソ連でも同じようなことがあったと聞いています。おそらく旧札をさっさと使ってしまいたくなる心理は、この辺りに原因がありそうです。

しかしすぐに使いたくなるのは旧札ばかりではありません。折り目が深々と刻まれていたり、汚れていたりする紙幣も、同じようにさっさと使いたくなるのです。

ソ連時代の紙幣は本当にボロボロでした。紙は皺だらけで柔らかく、下手をすればそのまま崩れてしまいそうで、取り扱いには気をつけなければなりません。とはいえ、どんなにボロくとも価値は変わらないのが紙幣というものですよね。ところが、その常識が覆る場面を見てしまったのです。

20 世紀末の話です。飛行機に乗ってみたら席が前のほうでした。当時のエアフロートは前方 4 列ぐらいがファーストクラスで、離着陸時には仕切りのカーテンを閉めますが、高

ということで、いろんな概論・概説書からの断片が少しず

つ集められた本書は、紛れもなく雑多なエッセイ集となった。一定の分野を俯瞰したければ、それぞれの本をお読みください。断片をあちこち覗くのが楽しいと感じられたら、他の著書もあちこち覗いて楽しんでいただければ、それで充分です」。

多分、黒田さんはこれが言いたかったんだな。

ということで、黒田本をたくさん読んでいる人は本書を読めばまた黒田本が読みたくなる。まだ黒田本を読んだことがない人も、本書を読めばさらに別の黒田本が読みたくなる。本書は実にお勧めのベスト・エッセイ集です。

時代に永らえる映画

ソヴェート映画傑作10選



ネーヤ・ゾールカヤ著
扇 千恵 訳
未知谷
A5判 288 頁
定価 5000 円＋税

ソ連・ロシアの映画芸術専門
家ネーヤ・ゾールカヤ (1924
年～2006 年) の手になるソヴィ

エト映画ガイド。著者は、「もっとも重要な時代と芸術的傾向を代表するものとして、ロシア・スクリーンの中から傑出した 10 作品を選んだ」(まえがきより)。

『戦艦ポチョムキン』(セルゲイ・エイゼンシュテイン監督、1925 年)

『第三メシチャンスカヤ通り』(アブラーム・ローム監督、1927 年)

『帽子箱を持った少女』(ボリス・バルネット監督、1927 年)

『チャパーエフ』(ゲオルギー・ワシーリエフ／セルゲイ・ワシーリエフ監督、1934 年)

『マクシムの青年時代』(グリゴリー・コージンツェフ／レオニード・トゥラウベルグ監督、1934 年)

『サーカス』(グリゴリー・アレクサンドロフ監督、1936 年)

『鶴は翔んでゆく』(ミハイル・カラトゾフ監督、1957 年)

『赤いカーリーナ』(ワシーリー・シュクシン監督、1974 年)

『アンドレイ・ルブリョフ』(アンドレイ・タルコフスキー監督、1966 年)

『砂漠の白い太陽』(ウラジーミル・モティーリ監督、1969 年)

これらはソヴェート映画史に残る名作ばかりだが、紹介はそれにとどまらない。10 作品のほかにもたくさんの作品が取り上げられているし、革命前のロシア映画スターから、1980

年代ペレストロイカ期の作品まで語られる。

かといって、これは作品概要を綴った普通の映画評ではない。名画の数々と同じ時代を生きた著者ならではのエピソード～俳優のちょっとしたしぐさや、観客の反応、作品の一場面などを通じて、読者に「この映画を観たい」という気にさせるような、「映画愛」のこもった映画評なのだ。

著者のあとがき『本州に住む私たちの仲間』と訳者のあとがきを読むと、著者ネーヤ・ゾールカヤと訳者扇千恵のソヴィエト映画を通じた深い交流と友情の上に、本書の出版が実現したことがよくわかる。多くのロシア映画愛好者の皆さんに手に取っていただきたい一書である。

海峡の向こうの隣人たち

稚内市役所からサハリンへ、駐在員の軌跡



三谷 将 著
花伝社
320 頁
定価 2200 円＋税

地理的に日本に一番近い外国は、中国・台湾ではなく、韓国でもなく、ロシアだ。北海道の北端・稚内からサハリン南端

クリリオン岬まで 43 km。国境の町・稚内市の「サハリン課」に配属され、稚内市サハリン事務所の所長を務めた著者による、これは日ロ地域交流の貴重な記録であり体験記である。

稚内市とサハリンのネベリスク市が友好関係を締結したのは 1972 年だが、稚内とサハリンとの地域交流が活発に行われるようになったのは 1991 年のソ連崩壊後のことだった

(91 年コルサコフ市と友好協定、95 年稚内コルサコフ定期航路開設)。稚内市には「サハリン課」という外国の地域名を冠した特別な部署ができ、2022 年に新型コロナとウクライナ戦争によって中断を余儀なくされるまで、約 30 年間にわたってサハリンとの密接な地域交流が続けられた。相互訪問旅行、青少年交流ホームステイ事業、ロシア人研修生受入事業、定期航路の運休・再開をめぐる交渉、地場産業を巻き込んだ貿易・経済交流など、本書に綴られた記録は、国と国との外交や政治交渉だけでは見えてこない生活に根づいた地域間交流の意味を考えさせるレポートとなっている。

なお、2023 年 8 月に稚内市を退職した著者は、「政治の都合に振り回されるのではなく、隣人としての結びつきを大切にしたい」と、「ル・デトロワ」という会社を立ち上げ、現在は個人事業主として、北海道とサハリンとの交流支援事業を継続している。(F)

6月4日、日本ロシア協会（西村康稔会長）の「ロシアを知るセミナー2026」講演会が東京で開催されました。講師は上月豊久・前駐ロシア特命全権大使（現、東海大学平和戦略国際研究所所長）。「プーチンの歴史認識とウクライナ戦争の行方」と題して、プーチン大統領がその歴史解釈をいかに自らの政策に利用しているか、ウクライナ戦争の停戦交渉をめぐるプーチン流交渉スタイルや今後の交渉の焦点などが分かりやすく話されました。以下は、その講演概要です。日ロ協会と上月先生の了解を得て掲載させていただきます（編集部）。



日本ロシア協会「ロシアを知るセミナー」／6月4日

プーチンの歴史認識とウクライナ戦争の行方

上月 豊久（前駐ロシア日本大使／東海大学平和戦略研究所所長）

2015年11月から駐ロシア日本国大使として8年間モスクワで勤務した。本年2月に新潮選書から『プーチンの歴史認識～隠された意図を読み解く』という本を出版した。本を書きながら学んだこと、特にロシアの歴史を踏まえながら、プーチン大統領の歴史認識と行動原理について説明したい。

大統領になるまでのプーチンの経歴

プーチン大統領は1952年レニングラード生まれ。1975年から90年までKGB（ソ連国家保安委員会）に勤務した。彼が勤めたのは対外防諜を担当する第一総局。外交官もそうだが、相手を身構えさせるのではなく、相手のガードをとるようなアプローチをする人の方が情報収集に向いている。ロトキンというプーチンと親しいチェリストが若い時、「自分はチェロが専門だけど、あなたは何が専門？」と聞いた時に、彼は「私は人間関係が専門だ」と答えたという逸話がある。プーチンは、徹底的に相手を分析して、掌中に取り込みながら話をする『人たらし』の資質を備えている。

これはあまり知られていないが、彼は大学の恩師であるサブチャクが市長をしている時に、サンクトペテルブルグ市の副市長を経験した。主な仕事は外国からの投資の導入で、この経験から彼は経済でプラグマチックな政策をとるようになった。2002年の夏に、小泉総理の訪露（03年1月）準備で、川口順子外務大臣に随行してモスクワでプーチン大統領に会う機会があった。川口大臣から対露投資案件として、「サハリン1・2への日本の合計投資額は40億ドルになる」という話を数字を挙げてしてもらったら、プーチンは急に姿勢を変

えて話に食いついてきた。プーチンを理解する上で、経済政策と投資への関心を押さえておく必要がある。

サブチャク市長の落選後、プーチンはモスクワに出て、1996年から大統領府で勤務する。当時のロシアは、ゴルバチョフとエリツィンの時代の負の遺産を抱えた混乱期だった。オリガルヒ（新興財閥）と地方知事たちが大きな力を持っており、国内政治は混乱を極めていた。

プーチン大統領が引き継いだ「負の遺産」

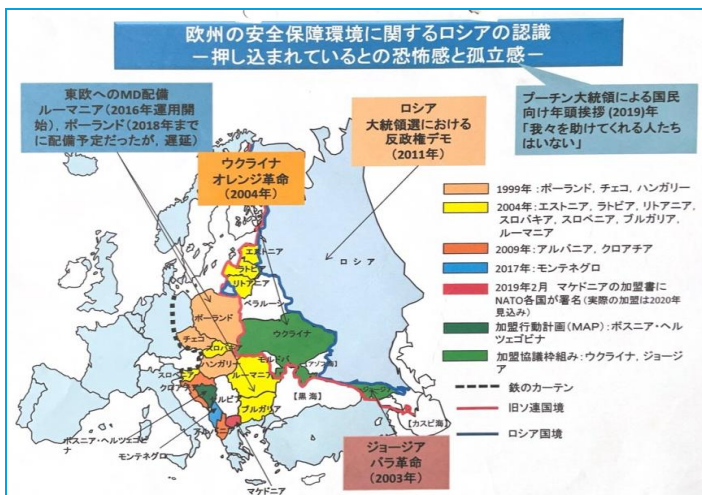
オリガルヒと地方勢力の横暴は、1996年6月大統領選挙でのエリツィン陣営の選挙戦術に起因している。共産党候補が圧倒的に強く、現職エリツィンの再選は極めて厳しかった。それをひっくり返したのがマスコミを支配するオリガルヒだった。「共産党が権力にもどると大変なことになる」と連日テレビ宣伝を流した。地方の知事たちには権限分担条約という、中央と地方の権限関係に関する個別の条約を秘密裏に結んで、資源の採掘権や徴税権を与え、それと引き換えに票の取りまとめを頼んだ。こうして、ようやくエリツィンは大統領に再選されたのだが、選挙後に世話になった人への恩返しが必要なのはいつでも同じ。エリツィン自身が心臓疾患で病弱だったことも相まって、国内政治では2つの勢力の専横が続いた。

オリガルヒは富とマスコミを独占し、エリツィンに影響力を行行使して首相の交代などにも口をはさんだ。当時、地方の知事たちは直接選挙で選ばれており、地方権力の分離的傾向が強かった。チェチェン問題の根っこには地方権力と中央権力の対抗関係があり、分離傾向が極端化したケースと言える。

経済はどうなったか。今から振り返ってみると、ペレストロイカ（ゴルバチョフ改革）やその後のエリツィンの民営化は、ロシア経済が資本主義化するために必要なプロセスだったと思う。しかし、ソ連崩壊後の急進的な市場経済化の中で実際に起こったことは、ハイパーインフレによる経済の大混乱と貧富の格差だった。民営化で国営資源を安く手に入れた一握りの人々は物凄い金持ちになった。折しも原油価格が下落し、ロシア経済は 1991 年から 98 年までの間に GDP が 40% もマイナスになった。ロシア人男性の平均寿命は 57 歳まで低下した。

1991年にソ連邦が崩壊し、ソ連は15の共和国に分かれた。大国ロシアは、ソ連人口の2/3、面積の3/4となり、国際的には大幅な地位の低下を経験した。冷戦の敗北とNATOの拡大で、ロシアは勢力圏を次々と失っていく。多くのロシア人が傷ついた90年代だった。かつてはアメリカと世界を二分する超大国だったプライドが地に落ちた屈辱感。この感覚が分らないと、その後のプーチン大統領のロシア国内での評価（高支持率）が理解できない。

資料:「NATO 拡大図」(1999 年~2019 年)

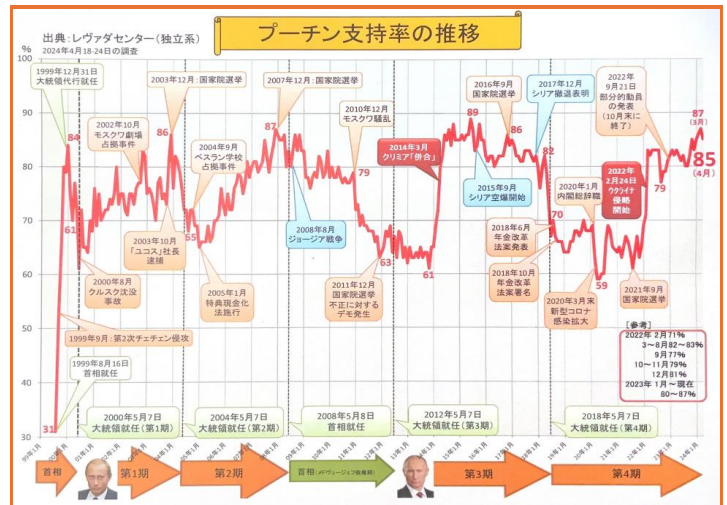


プーチンの国内改革（高支持率の背景）

2000年に大統領に就任したプーチンが目指したのは、中央集権体制（垂直的主権関係）の強化だった。まずはオリガルヒの政治的影響力を排除する。就任間もなくプーチンは13人のオリガルヒと会い、「新政権になったが、みんな仕事を続けてもいい。しかし、政治には口を出すな」と通告。結局、ボリス・ベレゾフスキー（大手石油会社シブネフチ、ロシア公共テレビ（ORT）の所有者）、ウラジーミル・グシンスキー（モスト銀行、新聞「セヴォードニャ」、独立テレビ（NTV）の所有者で「メディア王」と呼ばれた）などは、相次いで海外逃亡することになる。さらに、地方の知事は、2004年に公選制を任命制に変え、選挙ではなくモスクワから任命するようにして、権力を抑え込んだ。

こうした政治体制の変革の上に、プーチン政権は国民の支持を集めることによってその施策を押し進めるようになる。

私は「プーチンは民主主義者だ」と言っているわけではない。
プーチンは国民世論を操作できると考えており、その上で国民の人気を取りつかけながら政権を運営しているということだ。
資料;プーチン支持率の推移(レバダセンター)



表は、独立系世論調査機関レバダセンターが発表したプーチン支持率の推移。基本的に60～70%以上の支持率を維持しているが、大きな事件があると支持率が変化していることが読み取れる。

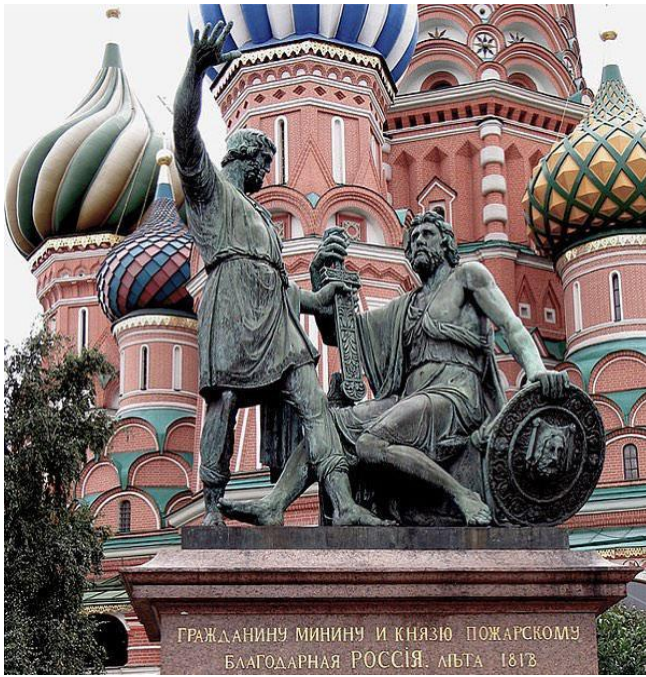
たとえば、2014年3月のクリミア併合、22年2月の特別軍事作戦の発動、この直後に支持率が20%以上もハネ上がっている。特徴的なのは、支持率が下がった時の不人気な政策は繰り返さないこと。22年9月に部分動員を発表した時は支持率がガクンと下がった。それ以降、プーチンは国民に不人気な動員をせず、契約兵の募集で兵士を確保するようになった。これがプーチン政治の第一の特徴だ。

二番目の特徴は、安定した経済成長と保守的なマクロ経済政策。ロシア経済は、石油価格の値上がりを追い風に、2000年から2007年まで毎年7%の経済成長を達成した。高成長下では経済政策が放漫になりがちだが、プーチン政権はインフレ警戒で財政赤字を出さない抑制的なマクロ経済政策をとった。プーチンは1998年アジア金融危機の時に、経済ショックでマイナス成長に陥った国にIMF（国際通貨基金）や米欧が介入するのを見て、経済の不安定化は外国の介入を招くことを痛感したので、保守的で堅実な経済運営をとるようになったという話だ。

歴史を利用した新たな統治原理～「国民統一の日」の制定

プーチン政治の第三の特徴は、歴史に根差す新たな統治原理の提示である。

17世紀初めにロシアは「スムータ」と呼ばれる混乱期を迎える。リューリック朝が崩壊し、後継者をめぐる混乱が続く中、ポーランド、スウェーデン、クリミアハン国が相次いでロシアに侵入して、モスクワはポーランド軍に占領された。



モスクワ・赤の広場、聖ワシリイ寺院の前にある商人ミーニンと貴族ポジャルスキーの像。

その時、商人ミーニンと貴族ポジャルスキーが率いるロシア国民軍がポーランド軍を撃退した（1612 年）。写真の像は 19 世紀に建てられたものだが、プーチンは大統領就任後の 2005 年に、11 月 7 日の「ロシア革命記念日」を廃止して、モスクワがポーランド軍から解放された 11 月 4 日を「国民統一の日」という祝日にした。

ソ連時代には 11 月 7 日の「革命記念日」に、赤の広場のレーニン廟の前で共産党指導者がズラリと並び軍事パレードを閲兵した。革命記念日は共産主義の理想を掲げるソ連の一番重要な祭日だった。プーチンはこれを廃止して、11 月 4 日を祭日にした。彼にとって、モスクワがポーランド軍から解放された 11 月 4 日の歴史解釈が、ロシア国民の愛国精神を高める非常に都合の良いメッセージとなるからだ。

そのメッセージとは、①ロシアはいつも敵に囲まれている、②国内の混乱は外国からの干渉を招く、③強い指導者と国民の団結が必要である、というもので、「国民統一の日」という新しい祝日を作ることによって、ソ連時代の共産主義から訣別し、愛国主義のロシアという国民統一の新しい原理を打ち出した。これは、プーチンが歴史解釈をどのように利用しているかということを象徴的に示している。

プーチン政治の第四の特徴は、ロシア正教の事実上の国教化である。ロシア正教は、ロシア人共通の文化、歴史のバックボーンとなって、ロシアの一体性を高め、中央集権を確保するのに決定的な役割を果たすようになる。今ではロシアの重要な国家行事には必ずロシア正教の司祭が同席する。プーチン自身も実に信心深い。

こうしてプーチンはロシアの新しい形を作った。中央集権化、安定した経済成長、歴史に根差した統治原理、そしてロ

シア正教、これが現在のロシア政治の基本的な流れとなっており、それが故にプーチンの高人気、高支持率の背景となっている。

ウラジーミル聖公の洗礼とクリミア併合

キエフ公国のウラジーミル聖公は西暦 988 年にクリミア半島のケルソネソスで正教の洗礼を受けた。東方正教を受け入れ、東ローマ帝国皇帝の娘を娶ることによって、ウラジーミル聖公は国の統一をはかった。

2014 年 3 月 18 日、プーチン大統領はクリミア併合に際して次のように述べた。「クリミアのすべては我々の共通の歴史と誇りを物語る。ここはウラジーミル大公が洗礼を受けた古代ケルソネソスの場所だ。正教を受け入れるという霊的な偉業は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの人々を結びつける全体的な文化や文明、人間的価値観の基盤を事前に決めることとなった」。

プーチン大統領は、ウラジーミル聖公がケルソネソスで洗礼を受けた歴史を、まさにクリミア併合の政策推進のために利用した。演説の中でロシア、ウクライナ、ベラルーシはキエフ・ルーシに発する一体の存在だと言っており、そこにはウクライナ戦争への布石が感じられる。プーチンが歴史を政治の道具として有効に使っていることを示すいい例だ。

これに関連して、2016 年 11 月 4 日、ウラジーミル大公没後 1000 周年の「民族統一の日」に、クレムリンのすぐそばに高さ 16 メートルの巨大なウラジーミル大公像が設置され、除幕式が行われた。式典でプーチン大統領は、「ウラジーミル大公は、ロシアの統一者、庇護者である。強力で統一され、中央集権化した国家の基礎を作った。ロシア正教の受入れは最も重要であり、この選択はロシア、ベラルーシおよびウクライナの共通の精神的源泉となるものであり、今日に至るまでわれわれの生活の道徳と価値の基礎を築いている」と演説した。

ウクライナ戦争に至る背景

ウクライナ戦争に至る背景で、歴史に根差した重要な論点が二つある。

一つは NATO の拡大批判。冷戦の敗北と NATO 拡大でロシアは勢力圏を失った。東西ドイツの統一に際して、「NATO は 1 インチも東に拡大しない」とベーカー米 국무長官が話したという話がある。アメリカの歴史学者が書いた『1 インチの攻防』という本に詳しい。ロシアから見れば、これが「西側がロシアをだました」根拠になっている。2007 年ミュンヘン安全保障会議で、プーチン大統領は NATO 拡大を強く批判し、西側の価値観に挑戦する大演説を行った。

「モスクワ・クレムリン・プーチン」という日曜夜のプロパガンダ色の強いテレビ番組で、開戦の 3 週間前に、プーチンがいろいろな機会に NATO 拡大批判の演説をした場面を

もう一つの論点は、2021年7月にプーチンが発表した「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」という論文。ここでは「ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人はすべてキエフ・ルーシの末裔である」と説明し、その中でウクライナ問題は実質的にロシアの国内問題として考えていることが強調される。プーチン大統領にとって、歴史は『政治の道具』そのものであり、自分にとって都合の良い歴史解釈を示すことで、自らの政策を正当化するために使っているのである。

ウクライナ戦争は今年 2 月で 5 年目に入った。昨年 1 月に第 2 期トランプ政権が発足して和平交渉が動き出し、8 月 15 日にアラスカでトランプ・プーチンの米露首脳会談が行われた。

第二の特徴は、交渉のチャンネルを複数化して、使い分けること。非公式チャンネルも控えに置いておく。露ドミトリエフ（直接基金総裁）と米ウィトコフ補佐官が非公式チャンネルを維持している。そして、重要な譲歩は大統領レベルで行う。大統領と話をしないと進まないの、大統領との会談自体が目的化することになる。

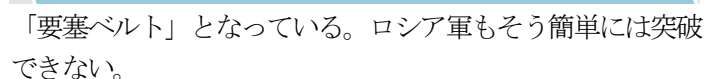
三つ目は、「こっちは急いでいない」という態度をとり、時間を味方にして交渉で優位に立つ。相手に提案を出させ、それに注文をつける。

これがプーチン流の交渉のやり方だ。

今後の交渉の焦点は2つある。領土の話とウクライナの安全の保証、この2点だ。

地図を見ると、25年8月から戦況はあまり変わっていない。濃い赤が戦争開始前にロシアが占領していたクリミア半島とドンバス（ドネツク州・ルハンスク州の一部）。薄い赤が戦争開始後にロシアが支配した地域で、濃い赤と合わせてウクライナ国土の18%が現在ロシアの支配下にある。

今、激しい攻防が続いているのはドンバス北西部で、ドネツク州の22%がまだ占領されていない。昨年8月15日にプーチンは、ロシアがまだ占領していない西ドネツクからのウクライナ軍の撤退を停戦の条件として要求した。しかし、ここには嚴重な要塞都市が作られており、4つの都市から成る



今はロシアもウクライナも言い出していないが、これを「凍結された紛争」として、現在の前線で戦闘を停止し領土問題の解決は先延ばしするという選択肢が考えられる。これは、先に言い出した方が立場が弱くなるので、どちらも言い出していない。しかし、現実問題として考えると、「先延ばし停戦」はあり得るのではないかと思います。

もう一つの焦点は、ウクライナの安全をどう保証するかだ。法的枠組み（＝集団安全保障）をどうするか、その実行部隊をどう確保するか、という2つの問題がある。しかし、いずれにしても停戦がすべての前提条件になる。仏独英などが軍隊をウクライナに派遣する用意があると言っている。それはロシアから見れば停戦監視団だけど、ウクライナから見ると安全を保証する多国籍軍だという、いわばダブルトークによって停戦監視と安全の保証を実効あらしめるのが一つの出口になるのではないかと。

プーチン大統領は「危機の根本的原因の除去が必要だ」と再三強調している。その意味は、①ウクライナの中立化（NATO 非加盟）、②非軍事化（保持する武力の制限）、③非ナチ化（政権交代）だ。これは事実上ウクライナに降伏を要求する内容で、プーチンのシナリオは、トランプがかなり強引にモスクワ寄りの条件をゼレンスキーに押し付けて和平交渉をまとめることを期待していたと思われる。しかし、米イスラエル・イラン戦争でトランプのウクライナ戦争への関心が低下し、トランプの権威もまた大幅に低下した。このことが和平交渉を難しくしており、プーチンのシナリオ通りに

は進まなくなった。

ウクライナ戦争の見通し

プーチンの支持率は、今年4月時点で65.6%。これは開戦以来最低の水準で、かつては80%を超えていた。支持率低下の原因の一つはインターネット規制に対する不満だと言われている。ウクライナのドローンによる長距離攻撃への防空対策で、最近ではモスクワでもインターネット規制が頻繁に行われるようになった。

しかし、最大の原因は経済不振だ。今年1—2月のロシア経済はマイナス1.8%成長。決定的なのは労働力不足（軍の拡大と若者の国外流出による）だろう。第二に、兵員不足から動員に追い込まれる危険を多くの国民が心配し始めていること。契約兵の募集は経済的に大きな負担になっている。第三に、戦死者の増加が顕在化してきたこと。これらがプーチン支持率低下の背景にあると思われる。つい最近、財務省と中央銀行の幹部が「これ以上戦争を拡大すると財政上限界に突き当たる。停戦を検討すべきだ」と提言したというニュースが報じられた。戦争継続にあたって、支持率の低下はこれから深刻な問題になっていく。

現在の焦点は、ウクライナの反転攻勢があるかどうかだ。米情報機関は、ロシアが多くの前線で守勢に立たされていると分析している。ウクライナは独自に開発したドローン兵器を投入し、ドンバスやクリミアの補給路、またロシア国内の石油施設などに長距離攻撃を仕掛けている。ウクライナは、ソ連時代はミサイルや航空機など軍需産業の一大中心地だった。ドローン兵器を自力で開発・改良し、大量生産している。しかし、ではウクライナがすぐにロシアを撃退して、占領地を奪回できるかと言えば、そうとも言えない。この戦争がどうなるのか、見通しを立てるのは非常に難しい。

ロシア・ソ連が経験した「三つの負け戦」の共通点

歴史を振り返ると、ロシア・ソ連は三つの負け戦を経験している。クリミア戦争(1853年-56年)、第一次世界大戦(1914年-18年)、ソ連時代のアフガニスタン戦争(1979年-89年)だ。この三つの戦争で共通しているのは、第一に、戦争を始めた指導者が敵の出方を見誤り、自国の戦力・能力の評価で過ちを犯した点。クリミア戦争が典型的で、ニコライ一世はトルコを相手に戦争を始めた時、イギリスとフランスが参戦するとは思っていなかった。イギリスは地中海からインドへの道を押さえるため、フランスはナポレオン三世が対外的な成果で国内人気を得ようとして、この戦争に参戦した。しかも、英仏二つの軍隊は産業革命を経て多くの蒸気船の軍艦を持っていた。これでセバストーポリを落とされた。

現在のウクライナ戦争についても、プーチンはNATOとアメリカがこれほど前面に出てくるとは思っていなかった。2014年クリミア併合の成功例から、「三日で終わらせる」と

思っていたと言われる。ということで、敵の出方を見誤ったという点は共通している。

二番目の共通点は、戦争が長期化し、国内では経済状況が悪化して、国民の不満が募り、これが停戦への圧力となった点だ。クリミア戦争4年、第一次世界大戦4年、アフガン戦争は10年、その間に経済が疲弊して、国民の厭戦気分が高まった。今回も少しその兆しが出ているように思われる。

第三の共通点は、戦争を始めた指導者と戦争を終わらせた指導者が異なる点。クリミア戦争は始めたのがニコライ一世、終わらせたのはアレクサンドル2世。第一次世界大戦はニコライ二世が始めて、ブレスト・リトフスク講和条約で終わらせたのはロシア革命の指導者レーニン。アフガン戦争はブレジネフが始めてゴルバチョフが終らせた。

第四は、戦争の結果、国内の政治経済体制に大きな変化が起きた点である。クリミア戦争の後には農奴解放が行われた。第一次世界大戦は途中でロシア革命が起きた。アフガニスタン戦争のあとにはソ連邦が崩壊した。

今後、ウクライナ戦争が、この「三つの負け戦」のパターンをなぞるのかどうか、それはまだ分からないが、一つの着目点として三つの戦争を比較した。ロシアはウクライナの国土の18%を占領している。歴史に精通したプーチンが、「この戦争に勝った」（これだけ領土を増やした）という説明をつけて戦争を終える可能性もあるが、プーチン体制そのものがひっくり返って、戦争が終わる可能性もなしとは言えない。

日本としては何をすべきか

(1) 「ウクライナの問題は日本の安全保障の問題だ」と岸田前総理は言われたが、私もそう思う。ウクライナ問題への対応を通じて、日本は国際社会での見識を問われている。

(2) ウクライナへの支援を継続することが必要だ。ウクライナは西側からの支援で辛うじて持ちこたえている。

(3) 戦争が終れば日本は復興支援の出番になる。地雷の除去などでも日本は重要な役割を果たすことができる。

(4) ロシアのウクライナ占領を不法なものと宣言すべきである。この間のアメリカを介した停戦交渉で、ロシアは占領したウクライナ領土を『国際法上ロシアの領土となったと認められること』と要求している。しかし、現在の前線で停戦して『先延ばし解決』となった場合、ウクライナはロシアの領土として認めない。ここで、日本がロシアのウクライナ占領を不法なものとはっきり言うことは、日本の北方領土問題の解決のためにも必要である。

(5) ロシアへのドアを閉じることは、内向きな国とするロシア政府の政策を助けることになる。この点は重要だ。孤立したロシアは通信などを制限し、内向き傾向を強めている。そういう時に、日本が交流のドアを閉じてしまうのは、得策ではない。ロシアとの文化交流、人的交流を続けていくことは、ロシアを内向きな国家としないために是非とも必要なプ

ロセスだ。本日冒頭に、西村康稔・日ロ協会会長が「来るべき時に備えて、ロシアとの交流を続ける」とあいさつされたことに、私も 100%賛成である。

ロシアにとっての戦略環境の大幅な悪化

ウクライナ戦争が始まった 22 年 2 月 24 日の朝 6 時、プーチン大統領はロシア国民を戦争へと誘導する長いテレビ演説を行った。侵攻開始後、私は東京へ報告電報を打った。報告の最後に私が書き加えたのは、「今回のプーチンの決定はロシアを孤立と衰退へ導くであろうか」「ブレジネフのアフガン侵攻の決定がソ連邦崩壊へと導いたことを想起する」という言葉だった。

今、果たしてロシアは孤立と衰退へと向かっているだろうか？ 判断はなかなか難しい。24 年 5 月 9 日の戦勝記念日にはモスクワに 25 カ国の首脳が列席した。ロシアは、中国やインド、ASEAN をはじめ、アジア・アフリカ諸国との関係を強化しようと外交攻勢をかけている。

しかし、はっきりしていることは、この戦争がロシアにとって戦略環境の大幅な悪化を招いたということだ。

①フィンランドとスウェーデンが長年の中立政策を捨てて NATO に加盟した。結果として、1400 キロに及ぶフィンランド・ロシア国境がロシアと NATO の「前線」となった。ロシアのヨーロッパへの海の出口バルト海は今や NATO の海に変わってしまった。

②NATO 諸国、日本、豪州等の国防費が飛躍的に増大し、結束が強まった。とくに NATO は国防費を GDP 2% から 5% に引き上げた。

③全ウクライナが反ロシアで統一された。ウクライナはロシアからの移住者が多い東部と第二次大戦後ポーランド領から組み込まれた反動的な西部から成り、ロシア語が分かる住民とロシア語が分からない住民が混在していた。ソ連崩壊後のウクライナで長く経済成長の失敗と政治的混乱が続いた大きな理由は東西対立で国がまとまらないことにあった。ところがこの戦争によって全ウクライナが反ロシアで統一した。これはロシアにとっては大きなマイナスだ。

④シリアのアサド政権、ベネズエラのチャベス政権、2 つの親口政権が最近相次いで崩壊した。ロシアはそれに対して有効な手を打てなかった。

ロシアにとって戦略環境の大幅な悪化が生じている中で、果たしてロシアは今後「孤立と衰退」に向かうのかどうか、これはウクライナ戦争がどのようにして終るのか、その終わり方にかかっていると思われる。

<質疑応答>

——「凍結された紛争」として領土問題の解決を引き延ばすことが一つの答えになるかもしれないと指摘されたことが非常に印象深い。これに関連して、22 年 3 月末の 이스タンブール

ル合意では、「クリミアの現状は変えず、15 年かけて交渉を行う」としていた。これはまさに「凍結された紛争」として残しておくという発想だ。また、同合意では、国連常任理事国（米英仏中露）をはじめとする保証国がウクライナの安全を保障するとして、ロシアも参画する安全保障の枠組みがほとんど合意されていたと言われる。 이스タンブール合意の時に出された知恵が、これからの交渉で参考になるのではないかと思うが、どうか。

戦争の見通しはどうか。欧州はウクライナが勝つまで支援を続けると言うが、ウクライナが勝利するというオプションをロシアが納得するとは思えない。ウクライナが勝つという幻想にとらわれて戦争が続いていく間に何が起こるか。追い詰めるとロシアは何をするか分からない。本当に核の問題が出てくると思う。ロシアの妥協ラインがどこにあるのかを見据えて、そこまで追い詰めない範囲での和平というものをウクライナも欧州諸国も考えないといけなのではないか。この戦争の見通しについて、再度聞かせてもらいたい。

上月 이스タンブール合意というのは、戦争開始の 1 か月後にロシア・ウクライナの代表が合意して持ち帰ったものだが、その直後にジョンソン英首相がキエフに乗り込んで「合意するな」と圧力をかけた。折しもブチャの虐殺事件が明らかになって、合意は吹き飛んでしまった。 이스タンブール合意の詳細な内容は「藪の中の話」で、なかなかそれをベースに議論がしにくい。ただ、ロシアが手放す可能性が低いクリミアについては 15 年後に協議するという表現で先送りされていた。領土の話で、「凍結された紛争」の形は他にもたくさん例があるわけで、結局はそこにしか落ち着かないのではないかと思う。

安全保障の問題は、 이스タンブール合意で議論されたのは、G5（米英仏中露）プラス仲介国のトルコなどを加えた安全保障組織だった。ロシアを加えた組織でこれがうまく機能するかどうか。国連安保理は五常任理事国拒否権があるが故にワークしていない。ウクライナ安全保障を実効あるものにするためには、何らかの形でロシアの拒否権を制限した枠組みを考える必要があるのではないかと思う。

이스タンブール合意の交渉が行われた戦争初期において、ウクライナはここまで米国と西側が助けてくれるとは思っていなかった。しかし、今や 4 年間戦争を続けて自信をつけたウクライナが、 이스タンブール合意に戻るというのは考えにくい。 NATO 事務総長は「ロシアがウクライナに勝てないと認識させることが重要だ」と言った。ロシアは攻め込まれた時の戦争では強い。だから、ウクライナが勝ってロシアが負けることにはならないというのはその通りだが、停戦和平に持ち込むためには「ロシアに勝てないと思わせること」が大事なのではないかと思う。

問題は、西側の世論がどこまでウクライナ支援を許容する

か。ヨーロッパではドイツもフランスも右翼的な勢力が強くなってきている。そこでウクライナ支援を継続するために西側で最近しきりに言われるようになったのが、「ロシアはウクライナの次に欧州のほかの国を狙っている」という議論。「次は、ポーランドだ」「リトアニアだ」とか言われている。しかし、ポーランドもリトアニアも NATO 加盟国だ。「ウクライナは NATO に入るな」と言ってロシアは攻撃しているのに、すでに NATO に加盟している国にさらに攻撃を加えるというのは論理矛盾だ。戦争のプロパガンダには注意する必要がある。

出口はやはり双方が戦争に疲れた時に来るのだろうと思う。

—— ソ連時代のアフガニスタン戦争は 10 年間続いて 15000 人の兵士が亡くなった。従軍兵士の『アフガン症候群』が当時大きな問題になった。ウクライナ戦争はこの 4 年間で数十万人が死亡したと言われているが、ロシアの実際の戦死者数はどれくらいと見ているか？ このウクライナ戦争でもアフガン戦争と同様の心身の障害が生じていると思われるが、まだほとんど報道されていない。『ウクライナ戦争症候群』の実態が分かれば教えてほしい。

上月 アフガン戦争に従軍したのは徴兵だった。徴兵で若い兵士が集められ、一定期間の特別訓練を受けて戦場に送られた。若い兵士がいきなり戦場に送られて過酷な体験をすると、その精神的打撃は非常に大きい。逃亡兵も相当生じた。今のウクライナ戦争では、ロシア軍は徴兵、部分動員兵、契約兵の大きく 3 種類の兵士によって担われている。戦争初期にウクライナへ進軍した兵士の中に徴兵が含まれていたが、その後、徴兵はウクライナには送り込まないとプーチンが約束した。それはまさにアフガン症候群を警戒して、徴兵された若者の母親たちが「子供をウクライナの戦場に送るな」と反発したからだ。

そのためプーチン政権は、契約兵を募集してウクライナに投入するようになった。契約兵の給与は月 30 万ルーブル (約 60 万円) + 死亡時手当 150 万ルーブル (約 300 万円)。これは地方の住民にとっては大変な高給だ。契約兵になるということは、報酬と引き換えに死ぬ覚悟があるということで、徴兵で連れていかれるのとは基本的に受け止めが違う。そこがアフガン戦争との違いだ。

もう一つの違いは、アフガン戦争が続いていたソ連時代末期は、まさにゴルバチョフのグラスノスチ (情報公開) の時代だった。さまざまな意見を自由に言うことができた。現在のロシアでは、戦争開始後の言論統制が非常に厳しくなっている。この二つの点で、アフガン戦争と比べて、現在のウクライナ戦争は受け止め方に違いが出ていると思われる。

ただし、最近は契約兵の募集に陰りが見られるようになって

た。財政的な負担も大きい。今後ロシアはどうやって兵士を確保するのか、再び動員をかけるとなると、世論の反発が大きな問題になる。

戦死者の人数については、いろんな説があって正確な数は分からない。しかし、少なくとも十数万人のレベルにはなっているようだ。このインパクトは無視できない。これから『ウクライナ症候群』がロシア社会の深刻な問題になる可能性は十分にある。

著作案内；2026 年 2 月発売

『プーチンの歴史認識：隠された意図を読み解く』

上月豊久著／新潮選書／240 頁／定価 1815 円 (税込)

<目次>

はじめに ロシアは「孤立と衰退」に向かうのか

第 1 章 ロシアの成り立ち プーチン大統領にとって歴史の意味は何か

第 2 章 正教の受け入れと歴史上の役割 プーチンの「洗礼の十字架」とは何か

第 3 章 ロシア「領土拡大」の法則 戦略か、機会主義か

第 4 章 動乱の歴史から導かれた統治の基本理念 なぜ「動乱の時代」を強く嫌悪するのか

おわりに 三つの「負け戦」とウクライナ戦争

講師略歴；上月 豊久 (こうづき とよひさ)

1956 年 10 月生

1981 年 3 月 東京大学教養学部 (国際関係論) 卒業

1981 年 4 月 外務省入省／北米局、大臣官房、欧州局、在ロシア日本大使館公使、在ボストン日本総領事館総領事などを歴任。

2012 年 9 月 外務省欧州局局长

2015 年 11 月 駐ロシア日本大使館全権特命大使

2023 年 12 月 外務省退官

2024 年 1 月 千葉工業大学特別教授

2024 年 4 月 東海大学特任教授兼平和戦略国際研究所所長

◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争の終わりはまだ見えません。本号収録の講演録で、上月豊久前駐ロシア大使が言われるように、落としどころは現在の前線で戦争を凍結するしかないと思うのですが、さてそれがいつのことになるのか…。▼しかし、最近、ウクライナ戦争後を見据えた動きがいくつか出てきているのは事実です。ロシア文化フェスティバルのオープニングで来日したシュビトコイ・大統領文化協力特別代表は滞在中、政財界の多くの代表と会談しました。5月末には経済産業省の声掛けで経済代表団がモスクワを訪問しました。▼私たち JIC も、文化交流、人的交流の拡大でこの流れに応えたいと思います。ロシアへの観光旅行の再開はまだ先の話ですが、語学留学やビジネス渡航は根強く続いています。他方、インバウンド訪日ロシア人客は大幅に増えています。困難は続きますが、将来を見据えて、日ロ交流の新しい芽を育てていきたいと思います。(F)

JICのロシア語留学・研修

37年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に日ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 37 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやってくれるのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様のバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン
相談 受付中!

期間：2027年4月1日より10ヶ月

締切：2026年12月10日

モスクワ国立大学 1,590,000 円(授業料 10ヶ月) 予価
サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,155,000 円(授業料 10ヶ月) 予価
ゲルツェン教育大学 998,000 円(授業料 10ヶ月) 予価
ウラジオストク極東連邦大学 420,000 円(授業料 10ヶ月) 予価
ベラルーシ国立外国語大学 422,000 円(授業料 10ヶ月) 予価
※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などががかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)